

## 情報環境の条件下における形而上学の転換

ヴォルフガング・ノイザー

翻訳：稲垣 諭

21世紀初頭における情報技術の技術的な展開は、それまで人間が実行してきた中でも環境への最大の人間の干渉(Eingriff)を表している。それは生の領域の一切に該当し、単なる技術的変遷の成果にはとどまらない。というのも、この新たな技術の下で生の領域の一切は、その構造において改訂されることになるからだ。

これまでの技術の新たな開発は、単にいくつかの特定の生の領域にとっての手段として常に利用可能となってきた。しかし20世紀、とりわけ70年代以降に起きた情報技術は、環境と人間の関係、人間相互の関係を、その社会のうちで根底から改訂してしまう。

人間の環境は、「情報環境」というものが人間の生活世界とその知覚世界を、人間の生の解釈と同様に、完全に変化させるほど急激に転換するのである(Uexküll, J.J. von (1928))。

このことが意味するのは、情報が刻印された新たな文化の背後に存立する形而上学が変化してしまったこと、そしてこれまでの哲学的な考察が再吟味されねばならないことを意味する。

### 情報技術による転換

情報技術によって多くの変化は以下のようにすでに起こっているか、もしくは、予見可能なものである：

- ・ 人間の生き方の展開は、生活世界の情報があらかじめ構造化されることによって刻印されており、情報技術によってその選択可能性のうちに制限されている。情報技術は、私たちにより綿密な生活状況を開かれたものにする。とはいえ、その技術がその特定の生活状況を促進するか、あるいは他の状況を阻止する限りにおいてである。
- ・ 私たちの日常生活にかかわる行政組織はもはや情報技術なしには思考できず、私た

ちのコミュニケーション・メディアは、コミュニケーション自身と同様に変化してきた。社会ネットワークは、自動化された買い物私たちの生活供給を簡素化するように、新たな可能性を開く。ナビを用いて道を運転する人は、地図をもはや知ってははいない。

- 仮想現実というリアリティの模造(Nachbildung)と、リアリティの一つの形式としての仮想現実、私たちの知覚の習慣性に影響を与える。(仮想)映画館は今のところなおも自由時間の享受となっているが、私たちの生産活動は、異なる場所において実施されるようになる。物理的な個人として私たちはもはや生産が行われるその場所にいる必要はない。このことは、分割された作業場所にとっても同様に、軍事活動や深刻な危機に見舞われた場所にも該当する。これはまた、自動運転車にとってもそうである(Spiegel Online (2016))。
- 資源は、情報システムを用いた卓越した管理によって大切に扱われる。日常と余暇に関わる諸機関〔例えばスーパーマーケットやスポーツジムなど〕は、情報技術を用いた健康基準のもとですでに準備されている。いかにして生活習慣と病気が関連するのか〔が問われる〕。
- 健康上の欠損は義足や義肢といった補完装具を用いて代償される。例えば、パーキンソン病は、情報技術の利用の下で治療され、情報技術は糖尿病治療での移植手術によって、従来の療法的方法としての継続的なセラピーを可能にする(Neuser, W. (2000))。これは学問も変化させることになる。医学の場合は、治療の下での病像が、従来の治療のものとは完全に異なるものに変化させられることを意味する(Neuser, W. (1996))。情動表出するロボ(Emo-Roboter)やパワードスーツ(Exoklette)も同様に配備される。
- より巨大な世界人口の扶助を改善する可能性が開示される(BMBF(2015))。
- ロボットやサイボーグが、人間が実行したくなかったり、あるいはできなかつたりする私たちの活動を引き受ける。コンピュータ・システムとコンピュータネットに並んで、可動的であったり、固定的であったりする自動機械が存在する。そこに、ヒューマノイド・ロボットとして、その見た目が人間の外見に比肩するようなロボットが加わる。知的環境における知のプロセスのさらなる構成要素は、サイバグ(Cybugs)とサイボーグ(Cyborgs)である(Dennis, L.; Fisher, M.; Slavkovik, M. & Webster, M. (2016))。例えば、カブトムシにインプラントされる単なる配盤、もしくは治療という目的のために、あるいは、包括的な記憶貯蔵を含む情報収集として人間や哺乳類に植ええられるプロセッサのユニットがみられる(Berres, I. (2016))。
- ウィキペディアには自動生成され、個々人によって作成されたのではない記事が

## 情報環境の条件下における形而上学の転換

1000 以上存在する。

- このことは、アルゴリズムの合理性に基づいた個々人の支配に通じ、
- 生活世界の知覚の変化に通じている。
- 知は根本から変化する。
- 事象のモデリングは、自動化されたプロセスに投入され、それまで未知であったものが知として産出される。
- すべての情動的な活動は、保存され、それらは世界の模造として、そのプロセスのなかで（過去についての）知としてほぼ完全に保管される。

これらのことは、例外なく技術的にすでに実現されているコンセプトであり、部分的には、広大なマーケットに仕えている(Wiegerling, K. (2011))。学問と経済によって計画された情報技術は、人間的な環境の対象領域一切に該当する(Uexküll, J.J. von (1928))。

### ヨーロッパの歴史における知の概念の転換

この状況にあって劇的なことは、情報技術の条件下における新たな状況が個々の主体の決定によるものではなかった、もしくは、決定によるものではなく、互いに影響を与え合う多くの個々の変化のシステム的な共働作用の結果だということであり、それが私たちの生のシステムにおける転換を引き起こしたことである。この転換は、ただそのシステムにおける転換としてのみ理解可能となる。そこには、根本的に転換された知の概念が存在している。

知とは、システムの形而上学的な概念であり、それを通じて私たちは文化の転換を理解することができる(Neuser, W. (2013 b), S. 68)。

歴史的に私たちは、長期的な期間における〔知の〕展開を、つまりヨーロッパ文化のさまざまな歴史のエポックのそのつどの自己理解を、知の概念が自己組織化する形式としてシステムの、以下のように記述する必要がある：

私たちがヨーロッパの文化の歴史の展開を、ある安定した状態から新しい安定状態への移行として記述するさいに見出されるのは、これらの安定した状態の間における移行の諸位相である。これら移行の諸位相において安定した状態は脱安定化され、そしてその目前にある安定状態が作り上げられ、準備される。この安定した諸状態とは、私たちの文化の伝統的な位相であり、不安定な状態とは、その伝統の後にくる位相である(Neuser, W. (2013 b), S. 46f)。そのシステムの状態を規定する変数が、知識という概念である。伝統的位相における安定化したパラメータと、そのポスト伝統的な位相における不安定化するパラメー

タとは、以下のような理解についての文化の担い手による同意である。すなわち、どのような条件の下で「知」が形成され、どのような規範がそこから生じ、どのような方法的手続きが知に至り、どのような根本仮定がなされねばならないのか、そしてそれによって「知」とは何であるのかが生起する、そのような理解である(Neuser, W. (2013 b), S. 71ff)。

とすると、ヨーロッパにはこれまで三つの伝統的な位相が存在している。何が知をそもそも形成するのかという問いとともにある古代、そして、古代の解答へのハンディキャップのもとで、外的な審級（神学的：神）のうちに知が根拠づけられ、知られたものの目的と、外的審級を通じて知るもののがあらかじめ与えられているように見え、知られたものと知るものとを被造物として理解する中世、そして第三に、知るものの内部に知を基礎づけるように見える近世である。

近世は、18世紀の初めにデカルトの哲学の言説とともに始まり、1830年あたりにヘーゲル哲学の言説をもって終わりを迎える。その時以降、私たちはポスト伝統的な時代にあり、それは、古い伝統的時代の知の表象を、近世の知の表象を批判し、その背後を問い、あるいは破壊し、新たな伝統的時代を準備している。私たちは、自分の文化の新たな伝統的位相の始まりに立っている。それは知識社会の時代であり、情報技術の背後に存立し、その技術によって可能になる知の概念を通じて特徴づけられるものである。知識社会の形而上学は、その根本前提において近世のものから完全に区別される(Neuser, W. (2013 b), S. 17-47)。

## 近世

近世の展開を考察すると、それは、知が主体のうちに基礎づけられていることによって特徴づけられる。この事態の決定的な定式化は、デカルトに由来する（この言葉〔主体〕自身は、ライプニッツによって始めて用いられている）。デカルトは主体を経験的主体として理解し、その主体は、普遍的な方法的懐疑を通じて自らの思惟のうちに知を基礎づける。彼は、その主体が実は単に論理構造である、つまり知の自己基礎づけという論理構造であることをいまだ理解してはいない(Neuser, W. (2013 a))。近世の終わりになって初めて、ヘーゲルがこの純粹に形式的で論理的な主体の内実を提示し、「意識」と「自己意識」とが心理学的ではなく、論理的なカテゴリーとして用いられるということを明らかにした(Neuser, W. (2010))。

経験主義、合理主義、啓蒙主義は、主体の方法論的地位に、知覚する自我として、また思惟する自我として、あるいは知覚し、思惟する自我として様々な解釈を与えてきた(Neuser, W. (2015 a))。

## 情報環境の条件下における形而上学の転換

後の啓蒙主義（カント、フィヒテ、シュリング、ヘーゲル）は最終的に、自我と主体の形式的構造を認識するに至る。カントは主体を超越論的主体として、つまり端的に理性原理として解釈する。ヘーゲルはこの意味でデカルトのプログラムを、主体を実体として把握し、自己展開する絶対的知の遂行として理解することで、完遂したのである(Neuser, W. (2004 a); Neuser, W. (2004 b))。主体が形式的構造であることが啓蒙主義の中で次第に明確になるにつれて、「主体」と「人間」、「人格」、「個体」とが（多義性のうちで）同一視される(Neuser, W. (2013 b), S. 143 ff)。

こうしたデカルト的プログラムのヘーゲル的な完遂、ないしデカルト的プログラム全体に対して、ある批判が定式化されてくることになり、主体の意味、すなわちまさにその妥当性を問いに付すことになる。

ニーチェから、後期シュリング、キルケゴールを経て、フーコー、そして多くの現代哲学者にいたるまで、近世の知による主体理論的な根拠づけが変容され、論難され、否定されることになる。

### 知識社会 - 一般的知識

知識社会という、ここで扱われる伝統の段階に至って、知の基礎づけは情報技術によって規定され、情報技術の手段に用いられるシステムの内に見出される(Rammert, W. (2007))。そもそも知識社会の形而上学において、主体は消失する。この主体の位置に、個人的な知を展開させる個々人が取って代わる。この個々人は、情報に基づいて構成された一般的な知を取り出し、それを個人の時間に合う、対象に関係づけられた「継ぎはぎされた絨毯」へと加工する。その際、彼らは、一般的知識の断片化された要素を受け入れることでそうするのである。

知の基礎づけは今や、一般的知識のうちにある。そこから個々人は、みずからの個人的な知を引き出してくる。この一般的知識は、「情報環境」を通じて、そのうちに基礎づけられている(Neuser, W. (2016))。アルゴリズムとこれらの絡み合いが、一般的知識の論理性と論証秩序にとっての物質的な骨格となる(Neuser, W. (2013 b), S. 91ff; 267f)。

実のところ、この一般的知識は、情報技術によって成し遂げられる知識社会のすべての諸構造を担っている知識である(Neuser, W. (2015 a))。

自己組織化する知的環境の知のプロセスは、物質的である。サーバー、データの記憶媒体、エージェント、コンピュータ・システムのセンサー、それらはデータもしくは情報プロセスの物理的な担い手として作動し、端末の統一を超えて、自動化された行為の実施を制御する。

この一般的知識（適宜変更を加えれば個人的な知でもある）を私たちは、システムとして自己組織化する知として理解する。この知それじたいは、自己組織化されたシステムであり、このシステム内部では、システムの構成要素が相互にみずからを安定させている。知が成立するのは、受容器が、それにとって既知のものとして提示されるものを受け取る時である。これら既知のものは、根底にある情報によって操作されたアルゴリズムという条件下で解釈され、そのように解釈されたものがエージェントによる活性化として活動することになる。以下の三つのパラメータすべてが相互に調整される。すなわち、解釈は因果的に生じるのではなく、相関関係に応じて生じ、それはセンサーを通じて知覚された状況の統合可能性という観点の下で、そして、エージェントの活性化可能性という観点のもとで生じるのである。知覚された状況がそのような状況となるのは、それが解釈の構想一般に対応する限りでのみであり、またエージェントにとっての活性化の潜在力として役立つ範囲においてである。エージェントの活性化が再度、機能するのは、アルゴリズムとセンサーの活性化潜在力による解釈との調整のもとにおいてのみである。

アルゴリズムによる解釈も、センサーの内容とエージェントの活性化の潜在力も、確かに相互作用するシステムのうちで折り重なる構成要素を（知として）呈示しはするが、各々のシステムはそれじたい再び自己組織化するシステムでもある。

センサーは相互に打ち消し合うことのない内容のみを持ちうる。こうした内容は互いに矛盾するかもしれないが、その矛盾は内容を無効にはならない。同様のことはエージェントにも当てはまる。ただしアルゴリズムは、みずからの方法を達成せねばならず、そうすることで形式論理学の特定の条件、とりわけ無矛盾性が維持される。アルゴリズムがそのプロセスを超えて変化する限り、それは例えば、ビッグ・データのなかのデータ（バンク）と結合するさいに、その結合と写像空間の一義性と完全性を保証する必要がある（Neuser, W. (2013 b), S. 263ff）。

## 知識社会 - 個人の知識

個人的なその人の知識は、一般的知識と同じような構造をもつ。しかしそれが実現するのは、人々が行為という観点において自分の経験の解釈に取り組みうるために、一般的知識を受け入れることによってである。個人の知識は、そのつど何度も固有に自己組織されたシステムである概念や経験、行為に基づく自己組織されたシステムとして解釈されうる。個々人の受け入れ可能性のもとに（自動機械でも同様に）、とりわけ解釈と解釈のひな型を受け入れる可能性もまた存在している。

個人はその場合、その人の許容能力と、解釈のひな型を新たに受け入れるのに必要とな

## 情報環境の条件下における形而上学の転換

る時間のために、常に（自己組織化された）部分的な知をもって、——これは一般的知識と比較されることになるが、——時間的な遅延や対象の制限のうちで知識の補填を受け入れ、その人のすでにある知に統合的に組み込んでいく (Neuser, W. (2013 b), S. 174ff)。

とりわけ個人的な知における解釈の構想を、私たちは概念として認識する。

概念は、明白に思考された内容を指示する顕在的な意味内実を含み、含蓄的もしくは潜在的な意味内実も含む。それらは文脈の関連と概念の歴史を含むが、それは、思考された内容の意味の身分を提示する価値づけにおいても同様である。

概念は変化しうるものである：

「変化と展開に対していくつかの異なるメカニズムが責任を負いうる。概念が差異化されていく帰結として、潜在的な意味内実の拡張が行われる。この拡張に際して、潜在的な意味内容に帰属させられた対象構造もしくは経験構造が広がる可能性が成立する。そこでは経験の空間が拡大される。概念の差異化のさらなる形式が、概念の精緻化において生じる。そこでは潜在的な意味内実がその外延において短縮されるのである。意味内実の分離と、新たな概念の創造によって、その際の差異化のもとで、経験の精緻な把握が達成される。概念のこの差異化において概念は、さらなるアスペクトへ分解されるか、そのつど妥当する領域が還元されることになる。概念の展開のさらなるアスペクトとして、意味の移動がある。そこでは、概念の意味が別の文脈へと移動させられる。最終的には、多くの概念を唯一の概念へと収斂させ、そのような意味の拡張を減少させる可能性がある。差異化、拡張、精緻化、ならびに意味の移動は、概念の展開のための道具として役立つ。それは、概念の接合組織の形成と、接合組織の構成に働きかける」 (Neuser (2013 b), S. 110f)。

概念は階層化され、意味の変更を通じて後続する意味が移動する限りで、この変化した概念に依存する概念領域の解釈がともに変更される。こうして、ある変化は概念の接合組織全体を変化させることができる。ある概念が階層の上位に位置すればするほど、それだけその概念を変えるのが難しくなる。

ヨーロッパ文化の意味の接合組織の最高次の概念が「知」であり、その「知」の変化が概念の接合組織の全体を変化させる。こうしたことが目下起こっているように思われる。というのも情報技術は、主体の能作としての知の解釈に拘泥しないからであり、知の基礎づけは、情報技術が機能するだけでなく、それがまた世界についての私たちの解釈の統治も引き受けていることに依存しているからである。

私たちが主体に帰属させる論理的機能の消失とともに、倫理学の新たな基礎づけの必然性が同時に生じることになる (Lenski, W. (2014))。近世は、その倫理を最終根拠としての主体とともに基礎づけてきた。この根拠がもはや有効に機能しないのである。知識社会にとっての倫理学は今や、新たな根拠と新たな基礎づけを必要としている (Neuser, W. (2014 a);

Dancy, J. (2004)。このことはとりわけ、「機械倫理学」にも該当する(Anderson, M. & Anderson, S. L. (2011); Wallach, W. & Allen, C. (2010))。

情報技術はヨーロッパ文化の形而上学をまさに遂行的〔パフォーマンスとして〕に変化させた。今や哲学者がその情報技術を理解することが重要になる。

## Literatur

Anderson, M. & Anderson, S. L. (2011): *Machine Ethics*, Cambridge New York: University Press.

Berres, I. (2016): Chip im Hirn: Gelähmter steuert erstmals Arm mit Gedanken. Erreichbar unter:

<http://www.spiegel.de/gesundheit/diagnose/querschnittsgelaehmter-steuert-arm-mit-chip-im-hirn-a-1086927.html>, [Stand: 16.04.2016].

BMBF (2015): Intelligente Technik hilft den Menschen. Pressemitteilung: 154/2015. Erreichbar

unter: <https://www.bmbf.de/de/intelligente-technik-hilft-den-menschen-1961.html>, [Stand: 16.4.2016].

Dancy, J. (2004): *Ethics without Principles*. New York: Oxford University Press.

Dennis, L.; Fisher, M.; Slavkovik, M. & Webster, M. (2016): Formal Verification of Ethical Choices in Autonomous Systems. In: *Robotics and Autonomous Systems*, 77, S. 1 - 14.

Lenski, W. (2014): Morals, IT-Structures and Society. In: Zweig, K.; Neuser, W.; Pipek, V.; Rohde, M. & Scholtes, I. (Hrsg.): *Socioinformatics - The Social Impact of Interactions between Humans and IT*. Heidelberg: Springer International Publishing, S. 153 -- 171..

Neuser, W. (1996): Gemeinsamkeiten und Gegensätze von Medizin und Religion aus philosophischer Sicht. Religiöse Begründungen für medizinisches Verhalten. In: *Der Osten -Der Westen. Medizin in der japanischen und europäischen Kultur*. Veröffentlichung des Japanisch-Deutschen Zentrums Berlin. Bd. 3, 1996, S. 150-156.

Neuser, W. (2000): Ideengeschichtliche Bemerkungen zur Prothetik. In: *Medizinische Servonen: Psychosoziale, anthropologische und ethische Fragen prothetischer Medien in der Medizin*. Hrsg. von H. Kächele, G. Ahlert, Stuttgart New York, 2000, S. 93-99.

Neuser, W. (2002): Ethische Dimensionen des Nichtwissens. In: *Veröffentlichung des Japanisch-Deutschen Zentrums, Berlin, 2002, S. 68-74.*

Neuser, W. (2004 a): Hegels Deutung der Naturgesetzlichkeit als Logik der Natur. In: *Jahrbuch für Hegelforschung*. Hrsg. von H. Schneider, Frankfurt, 2004, S. 21-30.

Neuser, W. (2004 b): Das Anderssein der Idee, das Außereinandersein der Natur und der Begriff der

## 情報環境の条件下における形而上学の転換

- Natur. In: Logik, Mathematik und Naturphilosophie im objektiven Idealismus, Festschrift für Dieter Wandschneider. Hrsg. von Wolfgang Neuser, Vittorio Hösle: Würzburg, 2004, S. 39-50.
- Neuser, W. (2010): Der systematische Ort der Logik im System der Wissenschaften, bezogen auf die Gegenwart. In: Logik als Grundlage von Wissenschaft. Hrsg. von Wolfgang Lenski und Wolfgang Neuser, Heidelberg, 2010, S. 7-16.
- Neuser, W. (2013 a): Räume im Wandel der Geschichte. Eine philosophische Betrachtung. In: Martin Junkernheinrich (Hrsg. ): Räume im Wandel. Empirie und Politik. Heidelberg, Berlin, New York 2013, 245-260.
- Neuser, W. (2013 b): Wissen begreifen. Wiesbaden, Heidelberg: VS Verlag für Sozialwissenschaften.
- Neuser, W. (2014 a): Was ist eine Ethik ohne Subjekt? In: Journal of New Frontiers in Spatial Concepts, 6, S. 1 - 11. Erreichbar unter: [http://ejournal.uvka.de/spatialconcepts/wp-content/uploads/2014/02/spatialconcepts\\_article\\_1798.pdf](http://ejournal.uvka.de/spatialconcepts/wp-content/uploads/2014/02/spatialconcepts_article_1798.pdf), [Stand: 16.4.2016].
- Neuser, W. (2014 b): Warum wir wissen: Logizität und Prozessordnung im Begriffsgefüge von logos und nous, ratio und intellectus, Verstand und Vernunft. In: Festschrift für Hans-Georg Flickinger, Porto Alegre 2014.
- Neuser, W. (2015a): Metaphysik nach Descartes. In: Prolegomena – Philosophie, Natur und Technik. Hrsg. von Karsten Berr / Jürgen H. Franz. Berlin 2015, S. 113 – 124.
- Neuser, W. (2015b): Wissen. In: Information Philosophie 2/2015a, S. 98-99.
- Neuser, Wolfgang (2016): Der menschliche Beobachter in der Wissensgesellschaft, in: Systemische Hermeneutik. Hrsg. von Arnold, Rolf / Neuser, Wolfgang. Hohengehren, 7467 – 882.
- Rammert, W. (2007): Technik - Handeln - Wissen: Zu einer pragmatistischen Technik- und Sozialtheorie. Wiesbaden, Heidelberg: VS Verlag für Sozialwissenschaften.
- Spiegel Online (2016): Automatisiertes Fahren: Regierung erweitert Rechtsgrundlage für selbstfahrende Autos. Erreichbar unter: <http://www.spiegel.de/auto/aktuell/selbstfahrende-autos-bundesregierung-erweitert-rechtsgrundlage-a-1086946.html>, [Stand: 16.4.2016].
- Uexküll, J. J. von (1928): Theoretische Biologie. Berlin: Suhrkamp.
- Wallach, W. & Allen, C. (2010): Moral Machines: Teaching Robots Right from Wrong. New York: Oxford University Press.
- Wiegerling, K. (2011): Philosophie intelligenter Welten. München: Fink.